序

太田俊太郎教授は平成六年三月に定年制度を選択され、同四月に北陸大学法学部教授に赴任されると同時に、慶應義塾大学法学部客員教授に就任された。そして、本年四月から慶應義塾大学名誉教授の職位をえらえて、義塾の法学部を去られることになった。

太田教授は、わが国におけるアメリカ研究のパイオニアである故藤原守胤先生の愛弟子として義塾法学部政治学科のアメリカ研究をひきつがれ、篤実な検証と鋭い分析にもとづく研究・教育によって、政治学科をして地域研究としてのアメリカ研究の牙城たらしめた。太田教授の義塾御退職を記念して編まれた本論文集の充実は、そのことの一端を示すものといいうるであろう。

私事にわたって恐縮だが、太田教授は私にとって義塾法学部における最も近い先任者である。そのために、お互い専攻する分野を異にする者ではあるが、法学部の運営に関しては常に行動をともにする運命にあった。いわば、義塾法学部をほとんど同時代的に生きてきたのである。このことは、私にとってまったくの幸運であったといわざるをえない。というのは、一九六〇年代から七〇年代にかけての大学紛争や近時の大学改革といった激動の中で、太田教授の人格の廉潔さと義塾法学部に対する愛情の真率さとは、傍らで行動する者にとって大きな心の支えになったからで

ある。

太田教授の御人格からして、義塾を去られてもなお、さらに深い愛情をもって法学部を見守って下さるにちがいない。われわれとしては、それに応えるべく努力を新たにしなければならないものと思う。それと同時に、われわれは太田教授のお力によって、北陸大学法学部がさらなる充実・発展の途を進むことを信じている。

今後も先生が御自愛され、ますます御活躍されることを心からお祈り申し上げる。

平成七年二月

法学部長　倉沢康一郎